

〔資料〕

妙幢淨慧撰『佛神感應錄』翻刻と解題(八)了

阿部美香・大久保美玲・塚本あゆみ・関口静雄

〔解題〕

淨慧の周縁⑦

天和三年(一六八三)春、月潭道激は卍山道白が宇治田原の補陀洛伽山
禅定寺僧舎で感得した靈芝觀音像を讚嘆する一文を草し、のちこれを「靈
芝ノ瑞像」と題して元禄九年(一六九六)六月に書林霖邨彌白から上梓した
『觀音新驗錄』に収めた。妙幢淨慧はこれを読んで、『佛神感應錄』後集卷
十三・七「安藝ノ嚴嶋明神諸説對辨ノ事 附タリ総論ノ事」に嚴島弁財天の
本地觀世音菩薩について云々する中で、

何ニ况 願身。化身。等流身ヲヤ月潭禪師靈芝ノ觀音ノ讚普門 示 跡難
思議。奚翅當年 現ニ 蛤蜊。
卍山禪師。首禪定寺ニライテ。靈芝ノ觀音ノ像ヲ感得シ玉ヘリ。自然ノ天工ナリ。月潭禪師 叙
及七言律ノ頌アリコレソノ末句ナリ。蛤蜊。觀音ノ像ヲ現セシコトハ。唐ノ玄宗ノ時ノコトナリ

と月潭が讚文に付した七律二首の末句をそのまま引いて、觀音の神通力が
無量の門を開通し種々の身を示現して一切衆生を円通せしめる難思議の事
象、すなわち觀世音菩薩の普門示現は唐玄宗皇帝が蛤蜊から觀世音菩薩が
出現する奇瑞を目の当たりにした往昔のことばかりではなく、卍山禪師が
感得した靈芝瑞像のように今現在でも起こりうることなのだという月潭の
学識と詩趣に富んだ指摘に深い共感を示している。

蛤蜊が觀音を生じ、また女神・女身、あるいは蜃氣楼を生ずるとい
は聖教にはなく、『西陽雜俎』(續集卷五)や『仏祖統記』(卷四)に載る唐朝
の俗説であるが、しかしこれがわが国近世においては広く巷間に受け容れ

られていたことは三十三觀音に蛤蜊觀音があり、御伽草子渋川版に『蛤の
草紙』が収録され、臨濟の白隱慧鶴(一六八五-一七六八)が好んで「蛤蜊
觀音図」を描き、画人たちにも狩野周信『蛤蜊觀音図』・円山応挙『蜃氣
楼図』・蠣崎波響『夢蛤美人図』・葛飾北斎『万職図考』『蛤吉原原図』・溪斎
英泉『画本錦之囊』・鳥文斎栄之『蛤美人図』等々の作品があることから
も容易に知られよう。蛤蜊が觀世音菩薩像を現出せしめた奇瑞は唐朝玄宗
皇帝の時のことだとわざわざ注記しているのは淨慧の典拠探索癖でもある
が、しかしその奇瑞を否定するどころか積極的に受容しているのであって、
ここにたとえば外典に載る蛤蜊觀音のような仏菩薩現出の所伝を祥瑞とし
て感受し慶ぶ淨慧が彷彿する。

そもわが国人は古来無類の茸好きだったようで、『今昔物語集』²卷二十
八第十八「金峯山別當食毒茸不醉語」・同三十八「信濃守藤原陳忠落入御
坂語」はじめ狂言「くさびら」等々から、単に食用として以上に茸には何
かしら靈威が存すると考えていたことが窺われる。まして靈芝の出現を慶
ぶことは今昔万古変わらぬことであって、それはたとえば博覽強記の儒者
林鶯峰(一六一八-一六八〇)が『瑞雲芝ノ記』³に「草中ノ瑞以レ芝ヲ爲レ
最ト。故ニ其ノ生スル也倭漢俱ニ無レシト云コト慶賀セ之ラ」といい、また『靈芝ノ
説』⁴に「靈芝ハ者艸中ノ瑞ナリ也。何ヲ以テ謂フ之ヲ瑞ト。蓋シ太平ノ世政治ル
人和スル時ハ則天地相感シテ土氣亦和ス。土氣和スル時ハ則芝艸生ス。古ニ曰ク王者
仁慈アル時ハ則芝艸生ス。是ナリ也。食スル時ハ之ヲ則テ壽シ。是ヲ以テ神仙多ク服シテ
之ヲ以テ擬ス不死ノ之藥ト。以テ其ノ非常ナルヲ。故ニ稱シ靈芝ト又稱シ神芝ト。若シ
其ノ修鍊不レ足ラ則雖ニ在レルノ山ニ之仙ト不能見レハ凡ソ中華本朝偶

逢^フ時^ハ芝^ノ艸^ノ生^スルニ則^レ無^シ不^ト云^フ賀^セ之^ヲ」と云うように、靈芝の出現は天
地安穩・天下泰平・王者仁慈の治世の象徴であり、かつ不老長生の靈薬と
考えられていたからであって、仏門においてはこれがことさら尊重せられ
て、たとえば『律苑僧宝伝』⁵⁾巻十五「青龍山野中寺慈忍猛律師伝」に、近
世律三僧坊の一つ河内青龍山野中寺を中興した慈忍慧猛が宇治田原の東陽
山巖松院に止住して補陀洛伽山禪定寺を兼帯する等々の活躍をしていた寛
文九年（一六六九）春二月、政賢英公から上宮太子草創の野中寺の退廃を
聞き、その再興を請われて故址に梵宇を建てた折の六月、寺庭に靈芝が四
十余茎生じた祥瑞があった時、慧猛はこれを「律法隆盛の兆」だと大いに
喜んだと伝えている。

諸国に靈芝の二文字を山号寺号に称する寺院が存する。洛東靈芝山光雲
寺は瑞龍山南禅寺開山大明国師無関普門（一一二二―一二九二）が弘安三年
（一二八〇）に撰津国四天王寺隣辺に開創した安国寺が始まりで、それを南
禅寺第二八〇世英中玄賢禪師（一六二七―一六九五）が寛文四年（一二六四）
後水尾院中宮東福門院の菩提寺として南禅寺北之坊に移して再興したもの
だが、秋里籬島撰安永九年（一七八〇）刊『都名所図会』は「靈芝山光雲
寺は若王子の北に隣る。禅宗にして、南禅寺天授庵英仲和尚の再興なり。
仏殿の本尊は釈迦仏を安置す。この地にある時、靈芝生ひ茂りて光雲空に
映じけるを、北闕より叡覧ありて靈場なる事を感じ給ひ、東福門より当寺
を御建営ありしとなり。瑪瑙石の手洗鉢は仏殿の後にあり、当寺の奇観な
り」と靈芝出現の祥瑞が光雲寺開創の端緒だったと記している。靈芝の出
現が一寺開創の由縁とする説明を巷間衆庶も違和感なく受容していたので
ある。

靈芝の出現は仏門においてはこの上ない慶事であって、その靈芝が観世
音菩薩の姿形そのものであったという卍山道白が感得した靈芝瑞像は五体
を投地して感拝すべき尊像であった。卍山の『源光菴靈芝觀音大士記』⁷⁾に
よれば、巷間に流布する靈芝觀音像の靈威を耳にした照山元瑤（<sup>後水尾天皇第
八皇子。母逢
春門院藤
原隆子</sup>）は使者を遣わして靈芝瑞像を林丘寺に迎え恭敬感拜して御影二幅
を描き、ことの次第を同腹弟後西上皇（<sup>後水尾天皇第八皇子。
母逢春門院藤原隆子</sup>）に奏上すると、上
皇は靈芝瑞像を宮御所に迎えて親しく供養されたといひ、また南都興福寺

一乘真敬法親王（^{後水尾天皇第十八皇子。母新広義門院園子}）も靈芝瑞像を請じて慶讃偈を製し、圓
照寺梅宮大通文智尼（^{後水尾天皇第一皇女。母明鏡院四辻与建子}）も瑞像を請じて供養したと伝える。
一乘真敬法親王は黄檗の隠元隆琦・高泉性激・月潭道激らと親交したから、
おそらく黄檗筋を介したのであろうし、梅宮大通文智尼は宇治田原巖松院
八世月堂道梁律師を介して靈芝瑞像を請じたのである。ここに後水尾院の
皇子皇女たち相互の交流関係と仏教信仰の一斑を垣間見ることが出来る。
林丘寺照山元瑤が靈芝瑞像を感得したというのは、元瑤と交流のあった月
潭道激はもちろぬ妙幢淨慧も知っていたと思われる。照山元瑤が仏教信仰
に篤いことはその行実からして明らかで、月潭・淨慧はともにそれを認め
て淨慧は元瑤を「人中の芬陀利華」と高評し、月潭は『觀音
新驗錄』に元瑤が林丘寺の本尊とした智証大師作という聖觀音像について
触れて、その篤信を次のように伝えている。（句読点を施した）

林丘ノ靈像

天台ノ下トニ有^ニ新建林丘寺。中ニ奉^ス觀音聖像ヲ。其像係^ル三井ノ智證大師ノ所
造^ル。梵相精嚴、無^シ與^セモ^ト埒^キ者^一。先^ニキニ在^リ大津池田圓信ノ家^ニ。里人禮拜
供養シテ、爲^ス觀音會^ノ者^ノ垂^テトス^ニ二十載^ニ矣。其靈應最^モ著^ル。未^レ可^ク以^テ言
ヲ宣^フ。姑^ク述^シテ^一二^一マ、以^テ起^ス時人^ノ之信^ヲ焉。三井ノ善法院法印^ニ有^ニ主事^ノ
人名^ハ某某者^一。與^リ同里^ノ能基氏^一有^リ鬘^ヲ、將^サ欲^ク加^レレト害^ヲ。法印預^メ知^レテ之^ヲ、
教^ヘ持^テ觀音ノ聖號及^ヒ普門品ヲ。能基每^ニ狹^レテ刃^ヲ、潛^シテ寺ノ側^ニ、將^サ候^レ
其出^ルヲ而刺^レ之^ヲ。至^テ兩月日^ニ、竟^イ不^レ見^ニ其ノ影迹^ヲ。乃止^ム。法印大喜^テ、
特^ニ爲^レメ衆^ノ講^シテ普門品ヲ以^テ闡^シ揚^ス聖德^ヲ。一日圓信詣^テ講席^ニ。一^リ幼子名^ハ
久松、弄^シテ刀ヲ爲^レ戲^ヲ。鮮血滂然^{トシ}テ淋^ニ其手^ニ。其母急^ニ視^レ之^ヲ、而手無^シ
傷^ヲ。方^ニ疑^テ訝^スル間、仰^テ視^レハ所^レノ奉^ス觀音ノ像^ヲ、自^ラ寶冠^ニ至^テ天衣^ニ、
皆有^ニ鮮血^一。舉^レテ家驚嘆^{不^レ已}。於是四方懷^ニ香^ヲ瞻禮^ス者、不^レ絶^ニ。聞^ク
及^シテ光^子内親王^ニ、傾^キテ誠^ヲ向慕^ス。迎^ヘテ至^テ宮中^ニ、廣陳^ニ供養^ヲ。上自^リ法皇^一、
合宮^ノ天眷咸^ク焚^テ香^ヲ頂禮^ス。因留^レ之^ヲ以^テ安^ス今^ノ寺^ニ。

※

元祿七年（一二六九）九月、妙幢淨慧は高野山に登ってしばらく逗留し、
真別所法雲律師の記しおいた「甚深回向經」を书写した。その後江戸に下

った折、ある国君の母公某院が印施した「甚深回向経」一卷を受得したが、それには「畧縁起」が付されていたといい、それを『佛神感應録』卷十一「三」「甚深回向経ノ功德縁起ノ事」の冒頭に収めている。要を採れば、

上総国小山辺郡内願成寺近くの小井戸という所の荷澤の里に心根の正しからざる女人がいた。貞和二年（一三四六）六月一日に重病を受けると九日には悶え苦しむ軋げまわって息絶えた。同年十一月二十三日の夜のこと、同郡極楽寺郷の住人高階氏の娘の夢にあの死んだ小井戸荷澤の女人が現れた。その顔肌は墨のように色黒く、髪は空に向かって高く逆立ち、爪は一寸ほどに長く生え、疲れ衰えた姿はまるで影のようだった。一目見るなり恐ろしく身の毛が弥立ち、急いで逃げたが亡女に追いかけられ捕まってしまった。亡女は娘をひしと摺んで泣く泣く云うには、「わたしは生前心拙く、律僧を姪落して多くの子を懐妊したが、人目を忍んであるいは土に埋め水に沈めて一人として取り上げませんでした。その深重の罪業によって冥土で絶え間ない責め苦を受けています。しかし生前、ある人が地藏菩薩像造立の勸進をしていた時わずかに二銭を寄進したことがあって、その少しの結縁ゆえに刹那の暇を得ることができ、ただ今こうしてここに来ているのです。お願いがあります。私のために法華経一部と甚深回向経一卷を書写して回向してください。そうすれば私は即時にこの苦罪から解き放たれて都率天に生まれ変わることができ、その「泣き口説き平伏するのだった。聞くも哀れで不便と思ひながら、しかし法華経書写を人に頼むべき財施も容易ではないので簡単には承諾しなかつた。すると亡者は頻りに取りついて強盛に責めるので、断り切れず法華経書写のみ承諾した。その折、娘が「甚深回向経」といふ御経は名さえ聞いたことがない」というと、亡女は「甚深回向経」といふ御経がこの世の中にあるのは本当です。よくよくお探下さし、一卷を書写して私を回向してください」と涙に咽び悲しげに云うので、ことに哀れに思えて回向経の書写も承諾した。すると亡女の身はたちまち金色に変わり、逆立つ髪は宝冠となり、垢と脂で汚れた粗末な破衣は煌びやかな美しい衣装に変わり、光を放ちながら青蓮華の台上に転生したと見て夢覚めた。高階氏の娘はつくづくと夢の不思議を思いめぐらした。ただ御経を書写する約束をしただけで、まだ一字も書

写していないのにこのような亡者転身の奇特を夢見たことに、夢ながらも法力の不可思議さに感嘆し、急ぎ甚深回向経を尋ね探したが誰も知らなかつた。田舎住まいには貴い御経は手に入らぬものかと煩悶していた折節、夢窓国師の弟子の周臺という僧が「大蔵経の中にあるからよく捜してみなさい」と教えてくれたので捜し求めたところ、貞和四年正月下旬、下総国飯岡の律院から出てきたのでようやくこれを書写し、亡女を回向することができたという。

というもので、淨慧はある国君の母公某院が印施した「甚深回向経」に付された右の「畧縁起」すなわち「功德縁起」をあるがままに写し、相国寺瑞溪周鳳編『善隣國寶記』を引いてこの施印本「甚深回向経」がその底本を足利義満・義持が鹿苑僧録の敵中周龍等々をして請来せしめたいわゆる高麗版に據るものと述べ、さらに明版すなわち黄檗版『仏説甚深大迴向経』は『仏説三品弟子経』等七経とともに「景暉」に収蔵されていると施注し、後文で高階氏の娘が書写した下総国飯岡の律院所蔵の「甚深回向経」もある国君の母公某院の印施本「甚深回向経」と同じ高麗版だろうと推量し、「法華経」書写に加えて「甚深回向経」を書写すれば、どのような罪業深重の亡者であっても即座に頓証菩提を得ることができ、「功德縁起」から知ったのだと感動をもって記している。聖教・經典の靈驗利益に深い関心を抱く妙幢淨慧はさらに『元亨釋書』卷十八願雜十之三「藤兼澄女」に伝える加州刺史藤原兼澄の娘の冥界遊歴譚を引いている。

加州刺史藤原兼澄の法華経信仰に篤い娘が病を受けて死んだが一宵を経て蘇生した。娘は冥界で金色光を放つ釈迦如来に逢ったが、そのとき釈迦は袈裟で顔をお隠しになっていた。釈迦は妙なる声で「善女よ、汝が法華経をよく誦むゆえにこうして我が身を見せ声を聴かせるのだ。しかし無量義経と観普賢経を誦まないで顔は見せないのだ。娑婆に還ったらこの二経を加えてますます法華経を誦みなさい。そうすれば私は顔を隠すこともない。わかったか。」とご教示なされた。娘は蘇生してのち法華経誦誦の際には無量義経・観普賢経の開結二経も誦誦した。娘はやがて立派な法華持経者になった。

淨慧は兼澄の娘が釈迦の教示を理解し、法華経を誦誦する際には開結二

經の読誦を添えたことを釈迦の御心に叶うことだといひ、それと同様に亡者のために法華經読誦に加えて「甚深回向經」を読誦することは大乘の回向法として理に適ったことだといふのである。

※

淨慧の説明によれば、ある国君の母公某院は「或禪師ノ勸」によつて「功德緣起」を付して「甚深回向經」を印施したのであるが、それはおそらく折帖の体裁であつたと思われる。ここに折帖装の一本があるから紹介しておきたい。一切経印房すなわち黄檗版大藏經摺刷で知られる京都貝葉書院が版行したもので、二百年ほど前に刻彫された板木を今も所蔵しているといふ。縦二七・三、横九・〇糎。紺色紙表紙に「佛說甚深大回向經」と刻した黄檗色題簽を貼り、卷末の刊記に、

慈海版一名宮様本版元

御經并佛教書籍問屋

京都市木屋町二條

發賣元

貝葉書院

とある。刊記は重再版時の事情によつて適宜改刻されるから、これが幾度か版を重ねたものと知れる。校訂して示す。

佛說甚深大回向經

如レ是ノ我聞ヲ。一時佛在ニ舍衛國祇樹給孤獨園ニ。與ニ大比丘衆八千人一俱リ。爾時世尊與ニ諸大衆一。前後圍繞セラレテ。而モ爲ニ說法シ。於ニ是會中ニ有ニ一菩薩。號シテ曰ニ「明天」。即從レ座起テ偏ニ袒右肩ヲ。右膝ヲ著ケテ。恭敬合掌シテ。前白レテ佛ニ言。世尊。欲レ有ニ所問。惟願世尊分別解說シ玉ヘ。

爾ノ時佛告ニ「明天菩薩摩訶薩」。善男子。欲セハ有ニ所問。莫レ得ニ疑難ヲ。如來當ニ爲ニ隨テ問ニ解說ス。明天菩薩即白レテ佛ニ言ク。云何菩薩少ク修善本ニ而獲ニ大果成ニ。多ク作功德ヲ福報無量ナル

佛告ニ「ハハ。明天菩薩摩訶薩。善哉善哉。明天。能於テ佛前ニ問フ如レ是ノ義ヲ。汝已ニ曾テ於テ過去無量諸佛ノ所ニ。植エ衆ノ徳本ヲ。供養シ諸佛ヲ。親シ近シ善知識ニ。能ク爲ニ樂福ノ衆生。發ニ甚深ノ問」。諦聽諦聽。善ク思ニ念セヨ。明天菩薩

白レテ佛ニ言ク。世尊。唯然リ受ケン教ヲ。佛告ニ「ハハ。明天ニ。諸ノ菩薩摩訶薩。當ニ於テ過去當來今現在諸佛ノ所ニ。修ニ慈心行ヲ。修ニ慈口行ヲ。修ニ慈心行ヲ。專心念佛ノ所レ行スル功德上。復次ニ明天。菩薩摩訶薩當應ニ往ニ詣シ如來ノ尊廟ニ禮拜シ供養シ。右膝ヲ著シ地ニ合掌右繞シ。散華燒香シ懸繒幡蓋ヲ作シ衆ノ伎樂ヲ尊重恭敬シ。以テ微妙ノ音ヲ歌ヒ甚深ノ句義ヲ。讚シ佛ノ功德ヲ隨喜シテ歡喜スレ善ヲ。佛告ニ「ハハ。明天ニ。云何菩薩摩訶薩。於テ過去當來今現在諸佛ノ所ニ。修ニ慈心行ヲ。修ニ慈口行ヲ。修ニ慈心行ヲ。念ニ佛ノ功德ヲ。善男子。菩薩摩訶薩。當レ念ニ如來堅固士。無上士。最勝士。爲ニ師子王ト勇猛無畏ニシテ。自カラ度シ彼ヲ自安シレ彼ヲ。自滅シ滅レ彼ヲ。說ニ眞諦ノ法ヲ安ニ立シ衆生ヲ。心無ク諂飾ノ淨戒具足シ。力無畏辯ニシテ永除ニ障習ヲ。於テ法ニ自在ニシテ無ニ與等一者上ト。如是ノ專心ニ念シ佛ノ功德ヲ。右膝著シ地ニ散華燒香。繒繒幡蓋伎樂供養。是ヲ爲ニ菩薩ノ修慈身行ト。以テ微妙ノ音ヲ歌ヒ甚深ノ句義ヲ。讚ニ歎シ如來無量ノ功德ヲ。是ヲ爲ニ菩薩ノ修慈口行ト。因ニ彼ノ身口ノ善根ニ念ニシテ佛功德ヲ。至誠恭敬ス。是ヲ爲ニ菩薩ノ修慈心行ト。明天。是則ニ菩薩摩訶薩於テ過去當來今現在諸佛ノ所ニ。修ニ慈心行ヲ。亦應ニ修ニ慈身行ヲ。修ニ慈口行ヲ。修ニ慈意行ヲ。等ク念ニ衆生上ト衆生ノ所ニ。云何菩薩摩訶薩於テ三世衆生ノ所ニ。應ニ修ニ慈心身口意行ヲ等ク念スルコト衆生ノ所ニ。如レ是ノ明天。菩薩摩訶薩不殺衆生ト。不盜他財ト。不邪婬ト。不妄語ト。不綺語ト。不兩舌ト。不惡口ト。不貪欲ト。不瞋恚ト。不邪見トナリ。云何菩薩不殺衆生ナル。於テ一切衆生ニ慈悲愛念シ。慚愧愍傷シ。永捨ニ刀杖ヲ。不偷盜トハ者。若シハ於テ聚落空處ニ所有ノ遺物不レハ與ヘ不レ取ヲ。不邪婬トハ者。若シハ女有レ主ト父母兄弟宗親所レト護スル。乃至見ニ彼ノ華一莖ヲ不レ取ニ起ニ欲想ト。不妄語トハ者。若ハ於テモ郷邑ニ若在ニ王者ニ。堪レ爲ニ證佐ト。眞誠實語ニシテ守レ死ヲ不レナリ虚ハラ。不兩舌トハ者。常ニ於テ彼此ニ起ニ和合ノ想ヲ。從レ彼ノ所聞ク不向レ此ニ說ク。從レ此ノ所聞ク不向レ彼ニ說ク。不惡口トハ者。輕語開噓シ先意問訊シテ。終ニ不レ下ニ以テ苦切惡言ヲ加テ衆生上ト。不綺語トハ者。時說シ實說シ知義ヲ而說キ。爲シテ利益スル彼ノ說上ト心口無レ差コト。不貪欲トハ者。於テ他ノ財利ニ不レ起ニ欲想ト。見テハ來取ノ者一心無レ吝惜ト。不瞋恚トハ者。於テ一切衆生ニ除ニ諸ノ恚恨ヲ。起ニ慈愍心ト饒益心ト安彼心ト。隨順シテ善攝ニ一切衆生ト。不邪見トハ者。有レ施有レ濟有レ說。有ニ父母一。有ニ今世後世一。有ニ苦樂行ノ果報一。世間。

有阿羅漢。自カラ知リ身作證。我生已盡梵行已成。所作已辦自カラ知リナリ不受後有。明天當知。彼ノ不殺不盜不邪婬。則是菩薩ノ修慈身行ナリ。不妄語兩舌惡口不綺語。則是菩薩修慈口行ナリ。不貪不恚不邪見。則是菩薩ノ修慈意行。修慈ノ身口意。則是菩薩等念衆生ナリ。

佛告。明天安天。菩薩摩訶薩。於テ過空當來今現在ノ諸佛ノ所ニ。修慈身行ヲ。修慈口行ヲ。修慈意行ヲ。及ヒ於テ過空當來今現在ノ一切衆生ノ所ニ。修慈身行ヲ。修慈口行ヲ。修慈意行ヲ。所有ノ功德果報。悉ク與ニ一切衆生ニ共ニ回向ス阿耨多羅三藐三菩提。明天。菩薩作ス如是ノ回向ノ者。是ヲ爲ニ菩薩少ク修善本ヲ獲ニ大果報。多ク作シテ功德ノ福報無量ナリト。佛告。明天安天。是菩薩成ニ就スル無量ノ功德一時。持シテ是ノ功德ノ回向ス無量ノ智慧。又共ニ一切衆生。盡ク回向ス阿耨多羅三藐三菩提。是ノ功德ヲ三種ニシテ。有リ三種回向。何等ヲ爲レ三ト。謂ク過空。當來空。現在空。無レ有ルコト回向スル者。亦無シ回向ノ法。亦無シ回向ノ處。菩薩摩訶薩當レ作是ノ回向。作是回向一時三處皆ナリ清淨ナリ。以テ此ノ清淨ノ功德。與ニ一切衆生ニ共ニ。回向阿耨多羅三藐三菩提。作是回向ノ者。無レ有ルコト凡夫及ヒ凡夫ノ法。亦無シ信行。亦無シ法行。亦無シ八人。亦無シ須陀洹向須陀洹。亦無シ斯陀含向斯陀含。亦無シ阿那含向阿那含。亦無シ阿羅漢向阿羅漢。亦無シ辟支佛向辟支佛。亦無シ有ルコト佛及ヒ向レ佛者。何ヲ以テ故ニ。法性無緣ニシテ不生不滅。無所住故。是ノ故ニ菩薩摩訶薩應ニ以テ是ノ三種ノ回向三種ノ清淨ノ功德。與ニ一切衆生ニ共ニ回向ス阿耨多羅三藐三菩提。是ノ菩薩作シテ是ノ回向一已。又復願言。若我生處常遇ニ諸佛逮ヒ甚深三昧ニ見ヘテ無量佛ニ成ニ就シ多聞。清淨智慧。弘誓。不レ捨ニ一切衆生。說ニ是ノ法一時。百千ノ天人皆ナリ願ニ欲ニ往ニ生センコトヲ阿閼佛國ニ爾ノ時佛告。尊者阿難。我向キニ說ク此ノ甚深ノ法一時。百千ノ天人皆ナリ願ニ往ニ生センコトヲ阿閼佛國ニ。阿難當ニ知ル。彼レ於レテ此ニ終ニ皆當ニ往ニ生ク阿閼佛所妙樂國土ニ。從リ一佛國ニ至リ一佛國ニ。供ニ養シ諸佛ヲ聽ニ受シ正法ヲ。得テ陀羅尼ヲ如レク說ノ修行シ。皆當ニ成ニ就ク不思議ノ慧。於テ五濁世ニ當テ得テ作佛。皆同一號ニ號ス甘露音王如來應供等正覺ト。當ニ知レ彼天受ルニ記前一時。百千ノ衆生皆ナリ發ニ阿耨多羅三藐三菩提心ヲ爾ノ時釋提桓因白シテ佛ニ言ク。世尊。如キハ我カ解ニ佛ノ所說ノ義。當ニ知レ此ヲ爲シ大功德趣ト。爲ニ無量功德ト。爲ニ無邊功德ト。佛言。憍尸迦。是ノ法畢竟淨ノ故。世尊。當ニ何ノ名ニ此ノ經ニ。云何カ奉ニ

持セン之ヲ。

佛告。釋提桓因。憍尸迦。是ノ經ヲ名ク大回向ト。亦名ク甚深法性回向ト。當ニ奉ニ持ス之ヲ。

佛告。憍尸迦。若有ニ善男子善女人。學フ是ノ回向ノ者。當ニ知レ是人必速ニ得シ無生法忍。能ク度ニ未度ノ者。安ニ樂セン百千無量ノ衆生。說ニ是ノ法一時。諸ノ比丘衆釋梵天人阿脩羅等。聞テ佛ノ所說ノ歡喜奉ニ行ス。

佛說甚深大回向經

普回向眞言

回向經本朝靈驗事

上総ノ國北山邊ノ郡、願成寺ノ畔、小井土ノ芹沢といふ所に婀娜たる女人あり。貞和二年六月一日に重病を受けて、同九日に死さりぬ。同年十一月廿三日の夜、同郡極樂寺の郷の住人高階氏の女房夢に見けるハ、彼芹沢の女人色黒き事墨のごとく、髪ハ天に生上りて爪一寸斗長く、其疲衰たる事影のごとし。一目見るより身の毛豎、おそろしき事限りなし。則急ぎ逃んとすれ共、彼亡者ひと捕へて泣く口説けるハ、我娑婆にありし時心抽くして清僧を落し、あまたの子を懷妊すといへども、或ハ土中にうづみ、或ハ水にしづめなどして、一人もとりあぐる事なかりき。其罪業ふかきによつて地獄に墮て苦を受ける事更に間なし。然れ共、我存生のむかし、ある人地藏菩薩をつくり奉るとて普く勸進をせられしにあふて、料足ニ又施したる。其結縁のゆへに只今刹那の暇を得て此所に來れり。仰き願くハ、法華經一部と回向經一卷を書寫して我爲に回向し給へ。すみやかに此苦界をはなれて都卒天に往生すへしと倒臥て申けり。其時高階氏の女房、此言葉を聞にあはれにおもへども、我も貧女の事なればかなふまじきといへり。彼亡者頻に歎きかなしみて強盛にせめければ、遁るべきやうなく、法華經を領掌して、扱回向經とハ終に名をも聞奉らざる御経なり。是ハ叶ふべからずといへり。亡者の云、それは実理也。我も罪障重き身にして此御經をしるべきやう更になし。されども十王裁断の時、かくのごとく我きく。およそ法界の衆生法華經の功德を得るといへども、いまだ回向經の功德をえず。此ゆへに都卒天に往生す

る事あたはずと云々。此事信仰して世間にも流布し給へ。閻魔王の教へなれば、是疑ふ處なし。よく／＼尋出して我願を叶へ給へと涙に咽び申ければ、其時高階氏の女房、殊にたうとくあはれに覺へて回向經も領掌しければ、彼亡者甚悦の眉をひらき、刹那の間に端嚴微妙の相好をあらはし、光りを放て青蓮華の上に座せりと見て夢さめぬ。そのうち夢想にまかせて在り、あふんごとに回向經といふ御經ハしり給はぬかたとふに、みなしらず聞ずとのみ答へけり。かゝる邊國なる故に尋ねがたきとおもひ、都にのぼり夢窓國師の御才子周皓禪師と申て、洛西の嵯峨といふ所に住院ましますに問ければ、甚深大回經とて大藏經の中にあるよしをくハしく教へ給へり。是によつて貞和四年正月下旬の比、下総の國飯岡の律院より出て書写し奉り畢ぬと云々。ある人の云、埴生郡飯岡山永福寺にハ今に至て回向經並緣起を板にしてほどこす也。以上三國傳記の中より略して出す。

※

右の貝葉書院版『佛說甚深大回向經』の經本文は大正新脩大藏經所載の失訳『佛說甚深大回向經』と同文で、これに付された「回向經奉朝靈驗事」は『佛神感應錄』に淨慧が採録したある国君の母公某院が印施した「甚深回向經」に付された「功德緣起」と字句に少異が存するが同趣旨・同文と認められ、巻尾に「以上三國傳記の中より略して出す」とあることから、これが『三國傳記』卷八第十一「上總國極樂寺郷居住高階氏ノ夢想ノ事 明大回向經事」に據つて編述された一文だったと知れる。するとある国君の母公某院が印施した「甚深回向經」付載「功德緣起」も『三國傳記』所載当該話に據つたものと理解されるが、「功德緣起」と「回向經奉朝靈驗事」には書承の形跡は見当たらず、またどちらも『三國傳記』の本文を直接そのまま引き写したのではない。現在『三國傳記』の製版伝本は寛永十四年版・明暦二年版・無刊記版の三種が知られるが、いずれも同一の板木からの摺刷であるという。しかし今日公刊された『三國傳記』の本文は編者の翻刻方針によって生じた差異がある。そこで明暦二年村上勘兵衛版『三國傳記』と、「功德緣起」および「回向經奉朝靈驗事」を数字句採つて比べると、

| | | | |
|---------|----------|---------|--------|
| 『三國傳記』 | 高階氏女房 | 高階氏ノ女 | 高階氏の女房 |
| 嬖女 | 心正カラザル女人 | 婀娜たる女人 | |
| 落二律僧ヲ | 僧ヲヲトシ | 清僧を落し | |
| 周蒙上座 | 周毫 | 周皓 | |
| 同次年ノ正月 | 同 四年正月 | 貞和四年正月 | |
| 飯岡自二律僧寺 | 飯ノ岡ノ律院ヨリ | 飯岡の律院より | |

のごとき異同が存し、『三國傳記』と、「功德緣起」・「回向經奉朝靈驗事」との間に他一本の存在を窺わせるのである。おそらく『三國傳記』所載「上總國極樂寺郷居住高階氏ノ夢想ノ事 明大回向經事」はその題名が示唆するように、「甚深回向經」が流布されるにあたっては常に「功德緣起」および「回向經奉朝靈驗事」が伝える上總國極樂寺郷居住高階氏の女房（娘）の夢想譚が添えられていたはずで、おそらくその夢想譚は唱導勸化の場において「甚深回向經」の靈驗利益を称揚する説草台本であったと考えられる。「功德緣起」また「回向經奉朝靈驗事」にしばしば見られる文章の微妙な改編、人名・地名の異同、また「回向經奉朝靈驗事」の不統一な本文表記は編者の稚拙というより複数の説草台本の存在を推量せしめる。

貝葉書院版「回向經奉朝靈驗事」は『三國傳記』にいう「飯岡の律僧寺」を「下総の國飯岡の律院」として「ある人の云、埴生郡飯岡山永福寺にハ今に至て回向經並緣起を板にしてほどこす」と追記している。永福寺が「甚深回向經」を所蔵し、これを板に刻して版行していたことは下総の地誌として最も古いとされる佐倉藩儒臣磯辺昌言撰『佐倉風土記』(享保七年(一七二二)成)に「永福寺 在二飯岡一、不レ詳ニセ開創ヲ、有レ鐘刻ニム徳元年ノ字ヲ、彫鑄畫佛像甚多シ、出ニ廻向經一、○經下一本有ニ大般若經、佛名經等ノ八字一俗傳ヲ、貞和中、上總ノ國高階氏ノ女、夢ニ所レ感スル三國傳記ニ所レ謂飯岡ノ律僧寺即チ是レ也ト」とあることから確かめられる。明記はないがおそらく「回向經奉朝靈驗事」のいうように、それには高階氏の女房（娘）の夢想譚が「緣起」として付されていたものと思われる。そうでなければ「貞和中、上總ノ國高階氏ノ女、夢ニ所レ感スル三國傳記ニ所レ謂飯

岡ノ律僧寺即_テ是_レ也_ト」の一文は記されなかつたはずである。しかし下総国香取郡生まれの農政家・国学者宮負定雄撰『下総名勝図絵』(嘉永三年(二八五〇)成)は「飯の岡永福寺」の境内図に添えて、「飯岡村にあり。開創未詳ならず、鐘に元徳元年の字を彫付て在り、宝物に、兆殿主の真筆にて、十六羅漢の画像掛軸あり、兆殿主ハ、京都東福寺の所化にて、頼朝時代の人なり、御領主田安殿、御上覧在らせられ、御紋付御筥御寄付あり。」と記しているだけから、幕末にはすでに「廻向經」は失われていたようである。

この永福寺は現在千葉県成田市飯岡に所在する真言宗智山派の寺院で飯岡山を称し、近隣同市吉岡に所在する同派雲富山大慈恩寺とともに唐僧鑑真が開創したという伝承を有する。永福寺について『千葉県印旛郡誌』は「飯岡村字内田にあり飯岡山と号す真言宗の小本字にして新善光寺末なり本尊を葉師如来とす孝謙天皇御宇天平宝字七年鑑真和尚の創立」と伝え、当寺が鑑真開創寺院すなわち律宗寺院と近隣に周知されていたことは疑いないが、それは当寺みずから鑑真開創伝承を流布していたからであろう。その片鱗は『下総名勝図絵』に見える。同書「飯岡山永福寺」条に「開創未詳ならず」と宮負はあえて鑑真開創伝承を無視しながら元徳元年(一二二九)の洪鐘銘・兆殿司真筆の十六羅漢画像の襲蔵宝物と領主田安殿の来駕上覧・寄付品を記しているのは当寺蔵版略縁起から写したものと考えられるのであり、また「雲富山大慈恩寺」条でも鑑真開創伝承に触れず「雲富山大慈恩寺略縁起に曰」と大慈恩寺版『雲富山大慈恩寺略縁起』を引いている。永福寺は回祿による衰微で宝物を失ったが、『雲富山大慈恩寺略縁起』の存在とその所伝によって両寺がみずから鑑真開創伝承を流布していたことが確かめられる。略縁起は大方軽視されるが、時として貴重有効である。『下総名勝図絵』に引く『雲富山大慈恩寺略縁起』を校訂して示す。

抑当山の始は、人皇四十六代孝謙天皇の御宇、天平宝字の頃、唐土楊州の鑑真和尚来朝して奈良の西大寺を草創し、其後当寺を開基せり。其より卅余代を経て寺院大に零落す。其時に当りて真源和尚又更に中興す。真源は橘道貞卿の子なり。人皇八十九代龜山院の御時、不慮の事ありて流人の身となり吉岡村に來りて住ける。公卿即道貞卿なり。妻は豊田氏にて一子無きを患ひ、

香取大神宮に參籠し一子を授からん事を祈りけるに、三七日盈る日に香取の神老翁と現し給ひ、一つの玉を妻に授給ふ。今在る子女の玉、是なり。程なく懐胎して男子を儲給ふ。此児才智人に超へ奇特多かりける。又無常の理を解り、出家の志深くして鑑真和尚三十余代の末資海真長老の弟子となり、学窓に身を委ね後に奈良の西大寺に掛錫して興正菩薩に従ひ、普く諸教を学ひ具足戒を受給ふ。其後吉岡に歸り当寺に住給ふ。暦応年中、吉野の上皇・光明天皇、副將軍源朝臣直義公に勅し給ひ、当寺を勅願寺となし、一基の宝塔を建立し給ひ、仏舍利を安置し、永錢三百貫を寄せられ、宝祚万々歳を祈り、丹誠を抽奉るべき旨、院旨を蒙りしなり。且、後小松院より院宣を下し給ひ、大の字を勅許し、寺号に冠らしめ大慈恩寺と称せしむるは、実に代々の帝王御崇敬浅からざりし故に数通の院宣并に鎌倉公方の御下文等、今に之あり。

○靈宝物には光明天皇御寄進の仏舍利 ○須徳院守本尊小刀仏の釈迦

○足利義満公守本尊正観音 ○松崎稻荷より寄進の玉幡二流 ○子安玉

○天狗寄進鉢 ○弘法大師加持石 ○院宣巻物 ○足利尊氏御馬添長刀

○副將軍直義公着脱中冑 ○鎌倉公方御代々御下文

此外宝物あげかそふるに違あらず。昔京都より香取へ勅使下向の時ハ当寺勅使の御宿なり。今に勅使門立てあり。是を明ずの門といふ。又後小松院と後光明院の御墓あり。

右の『雲富山大慈恩寺略縁起』は、当寺中興の真源和尚を藤原道長側近で和泉式部との間に小式部内侍を儲けた橘道貞の子だというのは伝説に過ぎるとしても、真源和尚が鑑真三十余代の末資海真長老の弟子で、西大寺興正菩薩叡尊から具足戒を直受した律僧であることを明かし、さらに当寺が暦応年中(一二三三―一二三四)に吉野の上皇すなわち後醍醐天皇と光明天皇の勅願所となり、後小松院(一二三七―一二四三)から大の字を勅許する院宣を得て寺号を大慈恩寺と改めたなど、歴代皇族貴顕から尊重されて今日に隆昌が永続していることを謳っている。

大慈恩寺がかつて慈恩寺と号していたころ、当寺が西大寺流律宗寺院であったことは荻野三七彦氏「鎌倉時代に於ける文化の地方伝播」が当寺所蔵梵鐘延慶三年(一二三二)三月二十九日付銘文に「雲富山大慈恩寺鐘銘」

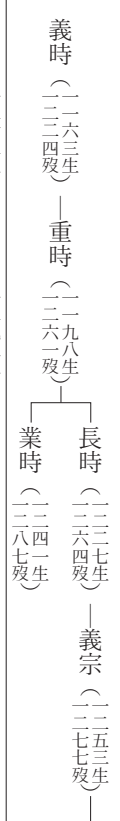
開山住持比丘眞源書」とある眞源が西大寺叡尊像納入文書弘安三年（一二八〇）九月十日付鏡慧奥書『授菩薩戒弟子交名』中に「信濃國人眞源 円定房」とあるその人であり、また大慈恩寺蔵『心永卅三年卯月十日大須賀朝信紛失状』に「本願胤氏法名御寄進」とあることから、眞源は叡尊の没する正応三年（一二九〇）八月二十五日まで大和西大寺で修行しており、それが叡尊歿後、大須賀胤氏の招請によって慈恩寺の開山になったもので、当寺の創建年時は正応三年から永仁六年（一二九八）の間であろうと論じられている。以来これが今日定説のようであるが、しかしそれでは梵鐘銘文の延慶三年（一二二〇）の説明がつかず、また『雲富山大慈恩寺略縁起』の記述を重んじれば眞源は叡尊生存中にすでに吉岡に帰郷していたと解されるから疑問が残る。

なお殿谷山新善光寺は山武郡横芝光町篠本に所在する真言宗智山派寺院で、成田山新勝寺中興一世照範空順の得度寺として名高く、同町尾垂浜は新勝寺開山寛朝僧正が京から船で運んだ不動明王像の上陸地点として知られる。照範空順は『當寺中興和尚之記』によると常州水戸の人で、元禄十三年（一七〇〇）三十七歳で新勝寺中興一世として晋山すると、翌十四年居開帳・同十六年深川永代寺八幡宮出開帳・享保六年（一七二二）下総諸国巡開帳を興行するなどし、歌舞伎役者市川団十郎家の活躍と相俟って新勝寺を飛躍的に発展させ今日隆盛の基を築いた人だが、こうした照範差配の新勝寺の動向と大慈恩寺・永福寺による略縁起等々の版行も無関係ではあるまい。

上総国極楽寺郷居住高階氏の女房の夢想譚は『三國傳記』が初見と思われるが、そこに記された極楽寺郷は千葉県東金市の大字名として、小井戸は同市松之郷の小字名として現在し、願成寺は同市松之郷願成地所在願本法華宗同夢山願成就寺がその後身とされている。願成就寺十八世日受筆『過去帳』に「当山起立処、大檀那平朝臣久時、弘安三年庚辰五月廿九日」とあり、大永元年（一五二二）条に「この年改宗。中興開基日誦」とあり、前身願成寺の草創を弘安三年（一二八〇）平朝臣久時すなわち北条久時の開基といい、それが大永元年に日蓮宗に改宗したと伝えている。この上総願成寺がかつて真言律宗西大寺派寺院であったことは夙く田中敏子氏

「極楽寺二代長老に就いて」²²に詳しく、相州鎌倉地獄谷に靈鷲山極楽寺を開いた初代長老良観房忍性が嘉元元年（一二三〇）八月二十五日八十六歳で歿すると、その年二世長老を継いだのは上総願成寺長老だった円真房栄真であることを『伝律凶源解集』『西大寺光明真言結縁過去帳』『極楽寺過去帳』『極楽寺宝物目録』等々の記事から闡明されている。栄真は西大寺叡尊像納入文書『授菩薩戒弟子交名』³等によると河内国の人で安貞元年（一二二七）に生まれ、嘉元元年（一二三〇）三十七歳のとき鎌倉極楽寺を継ぎ、正和四年（一二一五）にそこで歿したが、桃崎祐輔氏「総州願成寺の探索―房総における西大寺流真言律寺院の沿革小考」²によると、栄真は一二七〇年代までに東国に下り、五十歳を過ぎるころには上総願成寺長老になっていたようである。『西大寺叡尊遷化之記』⁵・東大寺凝然撰『律宗綱要』⁶等の記事から栄真はその晩年、西大寺流教団において極楽寺忍性・常州清涼寺長老董順房頼玄に次ぎ、西大寺二世長老慈道房信空よりも上位の重要人物であったとみられるから、おそらく上総願成寺は房総における真言律宗西大寺派の教線拡張のための一大拠点であったと推測されるが、栄真が去った後の動向は明らかではない。願本法華宗願成就寺が上総願成寺の後身だとして、願成就寺が大永元年（一五二二）五月に日蓮宗妙満寺派寺院として開山されるまでの凡そ二百年余の空白ははまだ埋められていないようである。

同夢山願成就寺の前身上総願成寺が弘安三年（一二八〇）北条久時による開基とされるのは、願成就寺十八世日受が諸記録を整理し延享四年（一七七七）十月一日に新たに記した『過去帳』に「当山起立処、大檀那平朝臣久時、弘安三年庚辰五月廿九日」とあるからで、同寺旧蔵の梵鐘の銘文に「願諸賢聖同入道場願諸悪趣俱離苦弘安三年庚辰五月廿九日施主沙門寂妙大檀那平朝臣久時」とあることがその物証とされている。しかし北条氏極楽寺流・赤橋流を『尊卑分脉五』²⁸に辿ってみると、



と次第する。しかし弘安三年久時はわずか九歳であって、何某の外護後援があったとしても十にも満たぬ少年に一寺草創の重責を負わせるのは無理がある。それに日受筆『過去帳』が当山起立を「弘安三年庚辰五月廿九日」と伝える年月日は明らかに梵鐘銘から採ったもので信ずるに足りない。想えば洪鐘銘に刻された弘安三年は久時の父義宗の歿後三年に当たっているのであって、この洪鐘は久時が寂妙なる沙門の助縁を得て父義宗三年忌追薦のために鑄造せしめたものと考えられる。とすれば願成寺はそれ以前すでに建立されていたはずで、それはおそらく長時あるいは義宗の仕業であったと推量される。北条氏極楽寺流が真言律宗西大寺派の良観房忍性と親交したことは鎌倉極楽寺朔立にまつわる一事を見ても明らかである。

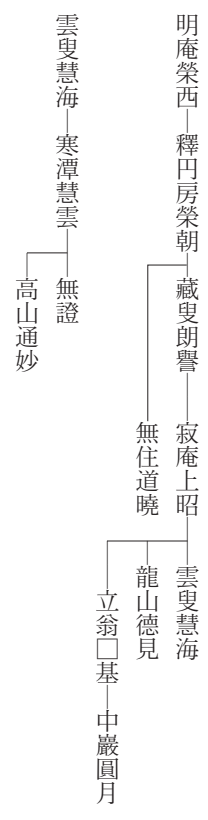
『元亨釋書』卷第十一「釋忍性」伝の一節に「武州刺史平長時欽性律行。新ニテ極樂寺ニ延之」とあって、長時は忍性の律行を認めていたのであり、重時が開基し忍性が開山した極樂寺を、父歿後に長時・業時兄弟が力を勸めて修築し巨刹に成したと伝えられるのも、北条氏極樂寺流の真言律宗西大寺派忍性一流への尊崇と外護を示している。だから長時あるいは義宗が朔したと考えられる上総願成寺もその当時は真言律宗であったに相違なく、桃崎氏が指摘されるように栄真が五十歳のころ上総願成寺に止住していたとすれば、すなわち建治二年(一二七六)ころ当寺は律宗寺院として建立され、その開山初代に栄真が請ぜられたものと考えられる。

上総願成寺については池上洵一氏が『三國伝記(下)』²⁹⁾に「臨濟宗黃龍派の雲叟慧海が開山と伝えるが現存せず、正確な所在地は未詳」と施注されている。その典拠は示されなかったが桃崎氏はこれを受け容れて、栄真が去った後も願成寺は律宗として存続したようだが、貞和二年(一二四二)から永享三年(一四三一)の間に雲叟慧海によって臨濟禪寺に改められ、さらに曹洞宗に転じ、七里法華の攻勢を受けて大永元年(一五二二)五月、日誦によって法華宗寺院に改宗されたと推量されている。池上氏の指摘は

おそらく『扶桑五山記』³⁰⁾「大日本國禪院諸山座位條々 同五年四月十三日東沙汰、」
「諸山」「上総州」項に、

道茂山願成禪寺開山雲叟(恵海)、(藏叟) 昴朗譽

とあるのに據られたかと思われるが、施注に山号の記載がないので他資料の存在を窺わせる。しかし池上氏の指摘はきわめて貴重であって、雲叟慧海について『禪學大辞典別巻』³¹⁾所載「禪宗法系図」・玉村竹二氏『五山禪林宗派圖』³²⁾等々によってその法脈を辿ると、



の如くで、雲叟慧海が葉上房明庵榮西の法脈を曳く臨濟宗黃龍派の禅を受けた鎌倉五山三位の龜谷山寿福寺僧であったと確認できる。明庵榮西は渡宋して臨濟宗黃龍派の禅を受法し、帰国して正治元年(一一九九)鎌倉に龜谷山寿福寺を、建仁二年(一二〇二)年京都に東山建仁寺を開いて日本禅宗初祖と称されるが、榮西の法脈を継いだ釋円房榮朝・藏叟朗譽はともに無住道暁『沙石集』³³⁾に載る著名な明徳であった。榮朝(一二六五—一二四七)は『元亨釋書』卷六・『延寶傳燈錄』³⁴⁾卷六に小伝が載り、榮西に嗣法したのち上州新田に世良田山長樂寺を開いた人で、『沙石集』³⁵⁾卷六上「榮朝上人之説戒之事」には説法・説戒にすぐれ多くの僧俗が聴聞に参じたと伝えている。藏叟朗譽(一一九四—一二七七)は『延寶傳燈錄』³⁶⁾卷六によると榮朝の法を嗣ぎ長樂寺に住持したが正元元年(一二五九)鎌倉寿福寺住持となり、晩年また長樂寺に帰った。『沙石集』³⁷⁾卷十上「壽福寺朗譽上人事」には智行兼備の名徳で、建長寺兀庵普寧が藏叟を評して「日本には過分の智者也」と云った話を載せている。師榮朝に同じく説法が巧みで禅客が多かったという。建治三年(一二七七)年六月四日歿。八十四歳。寂庵上昭(一二二九—一三二六)は『延寶傳燈錄』³⁸⁾卷六によると藏叟朗譽に学

び、渡宋して虚堂智愚らに参禅し、帰国後寿福寺の大休正念のもとで首座となり、のち藏叟の跡を継いで七代住持となった。正和五年六月十六日八十八歳で歿。諡号は宏光禪師。この寂庵上昭の弟子が上総道茂山願成寺を開山した雲叟慧海である。雲叟と道茂山願成寺について、このたび禅文化研究所藤田琢司氏の御示教によって次の二点の資料を知り得たので掲出する。すなわち玉村竹二氏編『五山文学新集』第四卷所収『中巖圓月作品拾遺』所載「妙首座住上総州願成寺山門疏」及び同第六卷所収『秋澗泉和尚語録中』所載「逍遙菴請爲雲叟和尚拈香」である。

○妙首座住上総州願成寺山門疏

上総州道茂山願成之寺、乃吾祖翁雲叟、權輿禪刹以來、甲乙其徒、以爲住持也、己亥冬、叟之孫高山妙公座元、以久行脚江湖之勞、而況復比來掃塔於積翠、轉見其行事之勤、故吾徒告之京師、乃賜□參誼大相公、御教書、敦請妙公、住持本寺、爲 國開堂演法、祝延 聖壽、於是、兩序耆舊、合詞迎駕、其詞云、

佛法付屬國王大臣、誠哉言也、達磨西來六傳而曹溪、孰敢問言之哉、曹溪分而二之、而后五派支之、獨我臨濟濟、得其正統、臨濟七世之后、釐而岐之、一曰楊岐、一曰黃龍、岐之宗也、自微而著、猶原泉混々、不舍晝夜、盈科而進、放諸海也、惟龍之產、一世二世三世、甚生繁多、以元祐衣冠蘊黃二公所扶翊而然也、遼金二虜、跋扈中原、炎宋南渡、中興之世、惟張丞相紫峯、力護吾圓悟、大惠父子之門、由是、吳越令行、小釋迦之識、若合符契、黃龍下除讒無示、責心聞之外、寂尔無聲、亦時哉、共惟、千光分燈一室之中、燭我海東粟散王之土、數傳而獲妙公、不亦欽哉、妙也、往哉欽之、

○逍遙菴請爲雲叟和尚拈香

住山二十三年、慈惠無偏、住世八十六歲、戒珠圓、探知大唐國裏無知識、直得逍遙菴中守派禪、黃龍遠孫警公嗣、源深既是堪泊船、禪也得教也得、瀛渤依舊混百川、動靜去來新羅箭、枯木花開半夜天、

右二点のうち中巖圓月作「妙首座住上総州願成寺山門疏」によって總州

道茂山願成寺の権輿が雲叟慧海であり、これを雲叟の弟子甲乙二人が継ぎ、さらに雲叟の法孫高山通妙が継いだと知られる。この道茂山願成寺が鎌倉の靈鷲山極樂寺二世長老を継いだ円真房栄真が長老として止住していた真言律宗西大寺派良觀房忍性一流上総願成寺であることは、近隣に同名の寺院が存在した痕跡がないことから疑いを容れない。すると上総願成寺は円真房栄真が去ったのち新たに臨濟宗黄龍派寺院道茂山願成寺として鎌倉龜谷山寿福寺の雲叟慧海によって開山され、以来雲叟門下の臨濟僧たちによって経営せられたと解することができる。

中巖圓月(一一三〇—一一三七五)は相模鎌倉の人で、その『自歴譜』及び玉村氏『五山文学新集』第四卷「解題」によると、父が竄せられ母が去って孤児となった徳治二年(一一三〇七)春、父方の祖母に連れられ寿福寺に入って僧童となり、寂庵上昭の弟子立翁□基に随時して以来、圓覺寺東明慧日・萬壽寺絶崖宗卓・永平寺義雲・建長寺靈山道隱らに参じて正中二年(一一三五)入元。天寧寺靈石如芝・雲巖寺の日本僧龍山徳見・百丈山大智寺東陽徳輝らに参じて元弘二年(一一三三二)帰朝。上野利根吉祥寺・鎌倉乾明山萬壽寺・豊後蔭山萬壽寺・京五山萬壽寺・建仁寺・等持寺・龍興寺に住した。「詩文以外のことについては全く小兒同様で、最も世渡に拙劣な偏頗な人格」と玉村氏は評するが、しかし明德を遍歴して多彩に学び、人事についても豊富な情報を得ていたはずであるから、道茂山願成寺の甲乙についても存知していたであろう。甲乙が二人とは限らぬがその一人を無涯仁浩(一一九四—一二五九)が伝えている。

無證首坐住上総州願成寺山門疏

眉間宝劍。孰敢嬰鋒。手面灵機。誰親辨的。真善知識。已見盛化於一方。大聖文殊。何論度夏於三處。惟嘉名而適合。迺令行其亦同。某人。雲叟親孫。寒潭嫡嗣。既是宗門碩匠。奇哉大法元龜。豈久卧福山龜谷之閑房。合思靈雲門睦州之風采。平田九十頃。鶴望相迎。街市三百家。雷動頻叶。我等掃門以候。惠然而來。衆皆洗耳以聽。熾然而說。幸作興其法社。庶無負於 聖恩。

右の「無證首坐住上総州願成寺山門疏」は『建仁無涯仁浩禪師語録』³⁸に載るもので、無涯仁浩が建仁寺住持の時の作である。無涯は出羽国の人

で寿福・建仁両寺で鐵庵道生に参じて入元、在元二十四年にして貞和元年帰国し、肥後能仁寺・鎌倉東勝寺を昇住して延文三年（一三五八）四月五日に建仁寺三十九世住持位に就き、翌四年正月五日に六十六歳で歿している。すると延文三年（一三五八）時点の上総道茂山願成寺住持は雲叟慧海の法孫で寒潭慧雲の嫡嗣である無證なる僧が務めていたと知られる。在元二十四年の無涯が「宗門碩匠」というのだから、無燈は学業・行実ともに優れた人物だったのであろう。

なお中巖圓月作「妙首座上總州願成寺山門疏」に記された「己亥冬」を玉村氏は延文四年（一三五九）と傍注されている。この「己亥冬」は高山通妙が道茂山願成寺の住持位に就いた年なのか、あるいは「吾徒告之京師」の年、「賜参誼大相公御教書」の年、また住持就任式である「開堂」の年とも解釈できるが、延文三年（一三五八）に無證が道茂山願成寺の住持位にあったとすれば、翌延文四年（一三五九）「己亥冬」は寒潭嫡嗣無燈の後継として高山通妙が道茂山願成寺の住持位に就いた年と判断することができる。この疏文は高山通妙を本寺寿福寺住持として迎えるための迎駕詞であるが、これを中巖圓月が両序に代わって作文したのである。諸寺を目まぐるしく転遷する波乱の日常を送る中巖圓月が延文四年以降に鎌倉に留まったのは、貞治六年（一三六七）六十八歳の秋に建長寺の公帖が下ったので下京して十月三日に四十一世として入寺し、翌応安元年（一二三八）春に退院するまでのわずか数ヶ月に過ぎない。おそらくその折り疏文の代作を依頼されたものと推量する。

秋澗道泉作「逍遙菴請爲雲叟和尚拈香」によって雲叟慧海の世寿が知られる。秋澗道泉は備中の人で大休正念の印可を受け、のち鎌倉寿福寺の住持となった。玉村氏『五山文学新集』第六卷「解題」によると、秋澗道泉は元亨元年（一三三二）九月十一日に寿福寺十一世住持位に就いて翌同二年六月頃まで住山し、同三年七月十日に歿している。秋澗道泉がそのわずかな住持位時に山内逍遙庵から拈香を拝請され、ために「逍遙菴請爲雲叟和尚拈香」を作文してその拈香会の導師を勤めたとすると、雲叟慧海の生歿年を推量できる。仮に拈香会が元亨二年（一三三二）に執行されたとして、またその年を雲叟慧海の歿年だとすると、「住世八十六歳」というのだから

ら生年は嘉禎二年（一二三六）ということになる。なお玉村氏『五山禪林宗派圖』は雲叟慧海の歿年を応永十四年（一四〇七）十二月二日とされているが、それでは「譽公嗣」と伝えられる雲叟慧海は嗣法の師藏叟朗譽（一一九四・一二七七）と存生が重ならない。氏の誤記であろう。なおまた「住山二十三年」が道茂山願成寺、あるいは鎌倉寿福寺をいうのか判断に迷うが、逍遙庵から拈香の請願が出されたことを重んじれば寿福寺山内を意味すると考えられる。おそらく雲叟慧海は榮西が開いた山内逍遙庵に止住していたものと思われる。

重言するが、房総における真言律宗西大寺派の拠点寺院であった上総成願寺は嘉元元年（一一三〇）真栄長老が鎌倉極楽寺二世に転出してのち、臨済宗黄竜派寺院道登山願成寺として鎌倉龜谷山寿福寺の雲叟慧海によって開かれ、以後雲叟の法脈に連なる甲乙、法孫の無證・高山通妙らが継いだと考えられる。真言律宗西大寺派寺院願成寺の閉山は長老栄真転出後それほど時を隔ててはいないように思われる。また臨済宗黄竜派寺院道登山願成寺は延文三、四年ころ無證あるいは高山通妙が住持位にあって、諸山に列せられていたことは慥かなことであるが、それがいつまで存続したのか明らかではない。なお上総國小山辺郡内極楽寺は真言律宗西大寺派と願成就寺至近所在の中峠山寿福寺は臨済宗黄竜派鎌倉寿福寺と無縁とは思われず一考を要する。

『三國傳記』卷八第十一「上總國極楽寺郷居住高階氏ノ夢想ノ事 明大同向經事」に伝える、律僧を落とし懐胎した児を土に埋め水に沈めた娼女は正和二年（一一三二）六月一日に死んだ。娼女の住む荷澤の里近くの願成寺は律宗寺院では既になく、新たに臨済宗寺院として開山した道登山願成寺であったはずである。娼女は極楽寺郷に居住する高階氏の女房の甚深大回向経供養によって兜率往生を遂げることができたのだが、高階氏の女房に「甚深回向経」が大蔵経中にあることを教えたのは夢窓疎石（一二七五・一三五一）の弟子で洛陽のはずれ嵯峨に住む周豪上座であった。この「周豪」を『佛神感應錄』卷十一「三」甚深回向経ノ功德縁起ノ事」は「周豪」、貝葉書院版「回向経奉朝靈験事」は「周皓」と伝える。

「周豪」は狩野永納編延宝六年（一二七八）開版『本朝畫史』⁴⁰卷三「中世

名品」に「僧周豪亦與_二夢窓_一同_レ時_ヲ其畫也大抵似_二鐵舟_一」と伝える画僧周豪のことと思われる。夢窓疎石と同時代の人で、画の本要は鐵舟に似るといふ。その鐵舟德濟（一三三六歿）は『延寶傳燈錄』卷二十四に、入元して順宗帝から円通大師の号を受け、帰国後天龍寺夢窓疎石の法を嗣いで天龍寺二世無極志玄を補し、京都万寿寺に住して晚年西山龍光院に退いたと伝える。語録があり、著書に『閻浮集』があつて、『本朝畫史』はその画業を「畫長_ニ於山水_一花鳥_モ亦善_ク少_レレナリ設_レト色_ヲ比_ニ曇芳_一爲_二稍實_一」_リと評している。また曇芳周應（一四〇一歿）は『扶桑五山記』『延寶傳燈錄』卷二十四によると、夢窓の法を嗣ぎ、のち鎌倉寿福寺四十八世・建長寺五十七世・円覚寺五十二世を経歴した人で、『本朝畫史』は「墨畫學_ニ牧溪_一善_ク花鳥竹石_ヲ一筆力粗豪耳」と評している。『本朝畫史』は周豪・鐵舟德濟・曇芳周應のほかにも夢窓疎石の弟子画僧として妙澤周澤・無等周位を挙げるが、彼らはその経歴からいずれも室町時代初期に画僧として重要な位置にあつた臨濟僧であつたと考えられる。

嵯峨天龍寺慈濟院に周豪筆「佛慈禪師像」₄₁（絹本着色）_{（掛幅装一）}が伝わる。仏慈禪師すなわち無極志玄（一二八二―一三五九）の頂相で、賛に、

貧之無極噴是／無極癡是無極／等分無極脚跟／下事は何無極／我屋裏人須着
／眼目延文己亥／二月十六／「天竜」（朱文方印）「無極」（朱文方内円印）「印」
（朱文方印）／在日有命／滅後敬書

とあり、画像の右袖外側最左端に「周豪」の方印が捺されている。この頂相一幅について『無極和尚傳』₄₂がその由縁を伝えている。延文四年仲春初、無極和尚が微恙を示されたので門人らは十一日肖像を呈して賛を請うた。すると和尚は「吾以十六日行矣。画當書其日」と空谷明心に命じて賛偈を託し、二月十六日徒衆を聚め遺誡すると安座して逝歸されたという。無極歿後、法嗣空谷明心は頂相に賛偈を書して師の遺命を果したのであるが、その頂相を描いたのは周豪であつた。無極志玄は順徳天皇の孫四辻宮尊雅王を父に持つ公家の出で、鎌倉建長寺兀庵普寧嗣法の弟子鎌倉浄智寺準開山南洲宏海のもとで出家し、京都東福寺無為昭元に学び、のち鎌倉円覚寺で夢窓疎石に師事して嗣法し京都天龍寺二世となつた人で、いわゆる初期

転派者の中でも最重要人物であり、国師歿後の夢窓派一門にあつて最高位にあつた人である。当然のことながら、臨命終時にあつて頂相が用意されるのは通例であるから、無極志玄自身その画師が周豪であることは存知し認めていたはずである。そうであればその当時、周豪が夢窓派一門において画僧としてもっとも重要な位置にあつたと推量できる。例えば貞和三年（一三四七）高階氏の女房に「甚深回向経」が大蔵経中にあることを教示し、延文四年（一三五九）無極志玄の頂相を描くまでの凡そ十余年の間、かつて上座と呼ばれた周豪はおそらく嵯峨にあつてその行末を怠らず研鑽していたのである。

「周毫」についてはいまだその関係資料を見出せないが、「周皓」は玉村竹二氏『夢窓国師』₄₃付載「夢窓門徒一覽（略出）」にその名が玉泉周皓と見え、臨川寺に止住し、西山給園庵に塔された人と知れる。『延寶傳燈錄』卷二十四に「京兆臨川玉泉周皓禪師。參禪暇。從_二義堂絶海_一錯_二綜風雅_一。嘗_レ廣_二東陵瓊吞碧樓偈_一曰。吞碧之樓最好奇。眼前風物世焉知。中天簷壓_二山雲形_一。後夜窓含_二海日輝_一。臺閣文章題不_レ及。島夷賈客禮從_レ宜。主翁垂示_レ人切。指點舟行岸即移。法嗣出_二出萬壽文鼎中銘_一。」と小伝が載り、五山文学の双璧と称される義堂周信（一二三五―一三八八）・絶海中津（一三三四―一四〇五）と交流して文筆の才を磨き、元僧東陵永瓊が詠んだ「吞碧樓偈」に和した詩偈が紹介されている。吞碧楼は博多市臨濟宗大徳寺派石城山妙楽寺にあつた百尺の高楼で、妙楽寺は遣明使の宿所で対外交渉の拠点だつた。東陵永瓊（一二八五―一三六五）は無学祖元の俗姪の子。曹洞宗宏智派の渡来僧であつた。足利直義の招聘によって正平六年（一三五二）に来朝し、西芳寺・天龍寺・南禅寺・建長寺・円覚寺を歴住し、のち曹洞宗から五山派に転進して夢窓国師の塔銘を撰した人である。語録『瓊東陵日本録』一卷がある。この東陵永瓊と詩文を応答し、五山文学の隆盛を導き、夢窓派の進展に貢献した義堂周信・絶海中津と交流した玉泉周皓もまた相当の僧位と学識を備えた臨濟僧であつたと考えられる。

上総国極楽寺郷居住高階氏の女房の夢想譚は『三國傳記』が初見と思われるが、仮にこれを淵叢だとして、ここから『佛神感應錄』に引くある国君の母公某院印施の「甚深回向経」付載「功德縁起」、また貝葉書院版

『佛説甚深大回向經』付載「回向經奉朝靈驗事」が生じたことになる。しかし留意すべきはそれが単なる書承のみによるものではなくて、上述したように、この夢想譚が法会や唱導の場において「甚深回向經」の靈驗利益を称揚するために用意された説草台本であったと考えられることである。高階氏の女房に「甚深回向經」について教示した僧の名が周豪・周毫・周皓と三様なのは書承に加えて口承によって生じた異伝と解される。真言律宗西大寺派忍性流の上総願成寺が嘉元元年（一一三〇）年長老榮真の鎌倉極楽寺への転出を機にほどなく閉山したであろうことは、臨済宗黄龍派寺院道茂山願成寺を開山した雲叟慧海が元亨三年（一一三三）に歿した秋潤道泉から拈香を捧げられていることから証される。雲叟慧海がどれほどの期間道茂山願成寺の住持を勤めたものか不明だが、その職責を十分に果し得たものと思われる。そうでなければ拈香会など奉行されなかったはずである。雲叟慧海の跡を継いだ無證は無涯仁浩艸「無證首坐上総州願成寺山門疏」に「宗門碩匠」と讃じられた人物であり、またその後を継いだ高山通妙は足利義詮の御教書を受け、のち鎌倉円覚寺五十二世に就いている。ともに道茂山願成寺住持として十分な業績を挙げていたゆえのことと考えられる。とくに高山通妙については中巖圓月が「妙首座坐上総州願成寺山門疏」の一節に「以久行脚江湖之勞」と記し、江湖を巡遊して教化の実をあげた長年の労苦を讃じている。高山通妙に限らず、おそらく道茂山願成寺の教化法は教線を拡張し他宗寺院にも少なからぬ影響を与えたものと思われる。その痕跡はたとえば飯岡の律院永福寺・吉岡の大慈恩寺に窺われる。永福寺には兆殿司真筆の十六羅漢画像掛幅が寺宝として伝えられている。たことが『下総名勝図絵』に見え、宮負定雄はわざわざ「兆殿司ハ、京都東福寺の所化にて、頼朝時代の人なり」と兆殿司が臨済宗僧であることを注記しているし、また大慈恩寺には利生塔の礎石が遺る。利生塔は足利尊氏・直義兄弟が夢窓疎石の奨めによって六十六国二島ごとに一寺一塔の寺塔を建立し仏舍利二粒を納めたもので、後醍醐天皇と元弘以来の戦死者の冥福菩提を祈り、同時に足利氏の威信を誇示し、さらに軍略上の拠点とすることを目的としたとされる。当寺には「曆応四年（一一三三）閏四月付足利直義直御教書」「曆応四年（一一三三）六月付足利直義仏舍利寄進状」

「康永四年（一一三五）三月付足利直義利生塔婆料寄進状」も襲蔵⁴⁴されているのであって、夢窓疎石に帰依深い足利尊氏・直義が推進する利生塔建立を受け入れた大慈恩寺が臨済宗の影響を受けなかったとは到底言い難い。高階氏の女房の夢想譚に窺見せられるように総州における臨済宗、ことに夢窓国師とその法脈門徒の道俗への浸透は広く深いものであったと思われる。それは総州が夢窓疎石由縁の地であったことも無関係ではあるまい。『夢窓国師年譜』⁴⁵は「三年癸亥正月。往上總千町莊。荆退耕庵。正中元年甲子。師在退耕。」等々と元亨三年（一一三三）から正中二年（一一三五）秋に至る二年半、疎石が夷隅千町莊に庵を結んだことを伝えている。曹洞宗金毛山太高寺裏山の金毛窟がその遺跡という。その退耕庵を後醍醐天皇の強請によって去り南禅寺の住持となったのであるが、翌正中三年には辞して鎌倉瑞泉寺徧界一覽亭に隱棲した。しかし激しく変転する時代の流れは疎石の隱棲を許さず、波乱の後半生を送ることになる。疎石は多くの寺院を開山し中興したが、中で最も思いのままに経営することができたのは靈龜山臨川寺であった。臨川寺は後醍醐天皇の第一皇子世良親王の追薦のために建立されたもので同門の元翁本元が開山住持であったが、元翁の示寂によって疎石に与えられ、加えて望外にも同寺を疎石の門葉に一流相承することが許されたのである。つまりまったく疎石個人の寺院であった。玉村竹二氏『夢窓国師』によれば、疎石の徒弟は観応二年（一一三二）秋の時点で一万三千一百四十五人を数えたという。この膨大な数の徒弟を把握するための門人帳もあったらしいが、疎石は手度の弟子には「周・中・梵・昌」などの系字を法諱の上部に付し、臨川寺住山時代の手度の弟子には「周」字を与え、夢窓派といえは「周某」という名を思い浮かべるほどで、「周」字を系字に持つ者は夢窓門下の中心人物であったという。とすれば高階氏の女房（娘）に「甚深回向經」について懇切な教示を与えた周豪・周毫・周皓はいずれも臨川寺の行実・学業ともに優れた僧たちであったと考えて間違いない。

それにしても高階氏の女房が亡女と交した夢中の約束事をきわめてわずかな期間に果たし得たことに驚く。貞和二年（一一三六）六月九日に死んだ女が高階氏の女房の夢中に現れたのは同年十一月二十三日夜のことであ

る。亡女が懇望する「甚深回向経」の書写供養を承諾した女房は「甚深回向経」を逢う人ごとに尋ねるが、しかし誰もみな聞いたことがないという。これも遠国ゆえのことだと、夢窓国師の弟子で洛陽嵯峨臨川寺に住院する周豪上座に尋ねてみると、いと簡明に「甚深回向経」が大蔵経中にある由を詳しく教えてくれた。この教示によって翌三年正月下旬に飯岡の律院永福寺所蔵の「甚深回向経」を尋ね出し、これを書写して約束通り亡女を推薦供養することができたというのだが、しかし事の顛末はわずか一月ばかりのことである。おそらく周豪の教示には「甚深回向経」が永福寺に所蔵されていることも含まれていたことと思われるが、そうした情報を周豪が把握していたであろうこと、また上総所住高階氏の女房と洛陽嵯峨臨川寺止住の周豪の交信が容易に行われていること等々を併せ考えると、道茂山願成寺と霊龜山臨川寺を結ぶ情報伝達の通路が整っていたことを窺見させるのであり、ひいて高階氏の女房の夢想譚が臨済宗僧徒の持ち伝えたもので、とくに夢窓疎石門下で常用せられた説草すなわち説教台本であったと拙解せしめるのである。それは夢想譚の前半が律僧の女犯⁴¹をいい、後半は夢窓疎石が弥勒信仰を有していたことから明らかである。なお云えは夢窓疎石が弥勒信仰を有していたことは周知のことであって、『三國傳記』巻四第九「夢窓國師ノ事」に「臨川三會^{リンセン}茅菴^{ホウソウ}縛期^{フクキ}慈氏^ニ暁^ラ」⁴²とあり、『夢想国師年譜』三元弘三年（二三三三）条に「北別創塔亭。構親王御祠。西偏建開山卵塔。中間安彌勒佛像。因扁三會院」とあるように、疎石は洛西に臨川寺を開くと開山塔を営み、中央に弥勒菩薩を本尊として安置し、その左右に開基世良親王と自身の寿塔を作ってこれを三會院と名付けた。すると門弟等らも競って、下生院（不遷法序）・慈聖院（龍湫周澤）・龍下院（春屋妙葩）・慈氏院（義堂周信）・率陀院（絶海中津）等々と弥勒に因んだ名を塔名としたのであって、夢窓疎石の門弟衆が弥勒信仰すなわち兜率往生を勸化流布したことは容易に推量できる。高階氏の女房もそうした勸化を受けた一人であったのであろう。妙幢淨慧が『佛神感應錄』に女房を「女」として「カノ禪尼」と呼んでいるように、女房（娘）は臨済夢窓門下に帰依した女性であったとみて大過あるまい。

なお高階氏を当地の領主とするのが大方であるが、あるいはこれを円覚寺大工高階氏と解してもよいのではないか。鎌倉番匠衆には建長寺大工河内家・鶴岡八幡宮社大工岡崎家などをはじめ寺社に専属した番匠家が少なくない。中で円覚寺大工高階家は円覚寺開山無学祖元に随伴して来朝した⁴³という家伝を有する名家であって、近世末期までその地位を保っていた。この高階家が鎌倉寿福寺雲叟慧海が道茂山願成寺を臨済宗寺院として開山するにあたって堂舎を禅宗様に改建また新建するために重用されたものかと思われる。現在も願成就寺の至近に所在する中埜山寿福寺はそのことと無関係ではあるまい。もって後考の課題としたい。（関口）

注

- 1 名古屋大学附属図書館蔵宝永八年刊『佛神感應錄』後集に據る。
- 2 「新訂増補国史大系」第十七卷所収『今昔物語集本朝部』に據る。
- 3 国立公文書館蔵内閣文庫元禄二年刊『鷲峯先生林學士全集』巻九所収に據る。句切点を付した。
- 4 国立公文書館蔵内閣文庫元禄二年刊『鷲峯先生林學士全集』巻十九所収に據る。句切点を付した。
- 5 関口静雄・山本博也編『律苑僧宝伝』（二〇〇七年二月、昭和女子大学近代文化研究所）。
- 6 竹村俊則氏校注『新版都名所図会』（一九七六年一月、角川書店）に據る。
- 7 『曹洞宗全書語録二』（一九三二年十二月、曹洞宗全書刊行会）所収。
- 8 東京大学附属図書館蔵元禄九年書林霖邨彌白刊『觀音新驗錄』上巻に據る。
- 9 瑞溪周鳳撰『善隣國寶記』（『統群書類従』第三十輯下所収）。
- 10 「七經」は誤刻であろう。内山順子・渡辺麻里子氏『曙光山月山寺了翁寄進鉄眼版一切経目録』（二〇〇一年五月、曙光山月山寺）によると、景暉に収蔵されているのは『仏説甚深大迴向経』を含めた十七経である。
- 11 「新訂増補国史大系」第三十一卷『元亨釋書』所収。
- 12 宮島コレクション蔵。
- 13 貝葉書院東濃氏御示教。
- 14 「大日本佛教全書」第一四八冊所収『三國傳記』に據る。

- 15 池上洵一氏『三國伝記(上)』解説(中世の文学。一九七六年十二月、三弥井書店)。
- 16 『影印房総文庫一』(一九七三年一月、崙書房)所収『佐倉風土記』に據る。
- 17 川名登氏編『下総名勝図絵』(一九九〇年二月、国書刊行会)に據る。
- 18 千葉県印旛郡役所編輯『千葉県印旛郡誌』(一九八九年九月、千秋社)に據る。
- 19 荻野三七彦氏「鎌倉時代に於ける文化の地方伝播」(早稲田大学大学院文学研究科紀要「四輯、一九六八年三月」)。
- 20 『新修成田山史』(一九六八年三月、成田山新勝寺)所収「當寺中興和尚之記」。
- 21 松之郷区誌編纂委員会編刊『松之郷区誌史料篇』(一九九六年四月)所収「願成就寺蔵日受筆『過去帳』」に據る。
- 22 田中敏子氏「極楽寺二代長老に就いて」(鎌倉「五号、一九六〇年九月」)。
- 23 奈良国立文化財研究所編『西大寺叡尊傳記集成』(一九七七年十月、法蔵館)所収「授菩薩戒弟子交名」。
- 24 桃崎祐輔氏「総州願成寺の探索―房総における西大寺流真言律寺院の沿革小考」(『六浦文化研究』八号、一九九八年十二月)。
- 25 奈良国立文化財研究所編『西大寺叡尊傳記集成』(一九七七年十月、法蔵館)所収『西大寺叡尊遷化之記』。
- 26 「大正新脩大蔵経」第七十四卷所収『律宗綱要』。
- 27 松之郷区誌編纂委員会編刊『松之郷区誌史料篇』(一九九六年四月)所収「同寺旧蔵梵鐘銘」に據る。
- 28 「新訂増補国史大系」第六十二卷所収『尊卑分脉五』に據る。
- 29 池上洵一氏『三國伝記(下)』(中世の文学。一九八二年七月、三弥井書店)。
- 30 玉村竹二氏編『扶桑五山記』(一九六三年三月、鎌倉市教育委員会)に據る。
- 31 駒澤大学禅学大辞典編纂所編『禪學大辞典』(一九七八年十一月、大修館書店)。
- 32 玉村竹二氏編『五山禅林宗派圖』(一九八五年十二月、思文閣出版)。
- 33 「大日本佛教全書」第一〇八・一〇九冊所収『延寶傳燈録』に據る。
- 34 正保四年小嶋弥左衛門版『沙石集』に據る。
- 35 玉村竹二氏編『五山文学新集』第四卷(一九七〇年九月、東京大学出版会)に據る。
- 36 玉村竹二氏編『五山文学新集』第六卷(一九七〇年十二月、東京大学出版会)に據る。
- 37 「続群書類従」第九輯下所収「自歴譜」に據る。
- 38 早稲田大学図書蔵永享三年写永源庵旧蔵『建仁無涯仁浩禪師語録三』に據る。
- 39 今枝愛真氏「禅宗の官寺機構―五山十刹の国別分布について」(『日本学士院紀要』十九卷三号、一九六一年十一月)。「扶桑五山記二」『建仁無涯仁浩禪師語録三』。
- 40 高知県立図書館蔵元禄六年吉野家惣兵衛・丸屋源兵衛刊『本朝畫史』に據る。
- 41 松村政雄氏「無極志玄と周豪の頂相画」(東京国立博物館編『Museum』一二七号、一九六一年一月)・東京国立文化財研究所美術情報資料部編『日本絵画史年記資料集成 十世紀―十四世紀』(東京国立文化財研究所、一九八四年三月)に據る。
- 42 「続群書類従」第九輯下所収「無極和尚傳」に據る。
- 43 玉村竹二氏『夢窓国師』(サーラ叢書10。一九五八年十月、平楽寺書店)。
- 44 『北総の古刹大慈恩寺の宝物』(成田史談大慈恩寺特輯号。一九六九年六月、成田山靈光館)。
- 45 「続群書類従」第九輯下所収「夢窓国師年譜」に據る。
- 46 『三國傳記』『佛神感應録』は高階氏の女房・娘と臨川寺の周豪・周毫の交信手段を明記しないが、貝葉書院版「回向經奉朝靈験事」は女房が嵯峨臨川寺に周皓を尋ね直接教示を受けたと記す。ために「甚深回向経」の入手・書写までに一年を要している。
- 47 石田瑞麿氏『女犯―聖の性』(一九九五年四月、筑摩書房)はこの夢中譚を取り上げ、無住道暁が『雑談集』等に僧尼の性の頹廢を嘆いて「木律僧」「荒禅僧」という表現を用いていることに注意されている。ともあれこの夢中譚は急速に拡大する律院と、そこに止住する律僧たちの淫戒女犯の実情を伝えるとともに、律院の周辺には心正からざる婀娜たる女人の姿影が常に存していたことを語っている。
- 48 湯浅学氏「鶴岡八幡宮の大工」(永原慶二・所理喜夫氏編『戦国期職人の系譜』一九八九年四月、角川書店)所収・坂本忠規氏「大工技術書『鎌倉造営名目』の研究―禅宗様建の木割分析を中心に」(二〇一一年、博士論文。国立国会図書館蔵)。
- 49 玉村竹二・井上禅定氏『圓覺寺史』第六章再興下(一九六五年二月、春秋社)。